戒嚴令期の臺灣における「文學場」構築への一考察

―救國團の文藝活動と編集者痖弦―

赤松　美和子

1　はじめに

一九八七年七月、三十八年閒に及んだ戒嚴令が解除された。その前年に發表された「將軍の記念碑」（『中國時報』、一九八六年）など張大春（一九五七年―）の一連の作品を以て、臺灣におけるポストモダン小說の幕が開く。その後トパス・タナピマ（一九六〇年―）「最後の獵人」（『民衆日報』、一九八六年）、朱天心（一九五八年―）「記憶の中で」（『聯合報』、一九八七年）、平路（一九五三年―）「奇跡の臺灣」（『聯合報』一九九〇）、李昂（一九五二年―）『迷いの園』（『中國時報』、一九九〇―九一年）、朱天文（一九五六年―）『荒人日記』（『中國時報』、一九九四年）等、戒嚴令期の「大きな物語」を解體したポストモダン小說、更に新たな主體を構築しようと試みるポストコロニアル小說が多數發表された。[1] これらの作品は日本でも翻譯出版され[2]るなど、新しい臺灣の文學として內外で廣く受容されていく。その初出誌の多くが、『聯合報』、『中國時報』の二大新聞の副刊である。[3] その一つである『聯合報』は、一九七七年には發行部數六十萬部、八〇年には百萬部を超える大衆メディアであった。[4]

P・ブルデューは、「資本」を個人が獲得し、所有し、利潤を得るための諸價値の總體と解釋し、その內「文化資本」を「廣い意味での文化に關わる有形・無形の所有物の總體」とした上で、「家庭環境や學校教育を通して各個人のうちに蓄積されたもろもろの知識・教養・技能・趣味・感性など」を「身體化された文化資本」、「書物・繪畫・道具・機械のように、物質として所有可能な文化的財物」を「客體化された文化資本」、學校制度やさまざまな試驗によって付與された學歷・資格など」を「制度化された文化資本」、以上の三種に分類した。[5]

大衆新聞が文學の最も主要なメディアであったという事實は、當時、文學が社會のなかの大きな一角を占め、文學を、仕事、教養、趣味、或いは手段として、つまり「文化資本」として備えた讀者、作家たちが相當數存在したことも示唆しているのではないか。それは國民黨が臺灣へ渡って中國語が日本語に取って代わり「國語」となってからわずか三十年後のことである。更に注目したいのは、これらの作品を發表し、その後の臺灣文學界をリードしていく作家の多くが、省籍に關わらず戒嚴令施行直後の一九五〇年代に生まれ、戒嚴令期の文學教育を受けていることである。

本稿の目的は、戒嚴令期の臺灣において、文學を「文化資本」とする讀者、作家層がどのように形成されていったのかを考察し、文學の生産及び受容の場の生成を探ることにある。また研究對象は、一部の作家や文壇のみならず「文學場」全體に及ぶ。そこで、戒嚴令施行直後に大きな影響力を持った中國文藝協會、中華文化奬金委員會など既に研究が進んでいる外省籍作家中心の文藝組織ではなく、臺灣全土の青年・學生を對象として大規模かつ長期的に展開された中國青年反共救國團の文藝活動に着目した。とりわけ、一九六〇、七〇年代に中國青年反共救國團刊行の文藝雜誌『幼獅文藝』の編集長を務め、その後七、八〇年代に『聯合報』「副刊」の編集長を歴任し、八四年に商業文藝雜誌『聯合文學』を創刊した詩人痖弦の編集活動を中心として、戒嚴令期の臺灣における「文學場」の構築について考察していきたい。(7)

2　救國團の文藝活動

(1)　救國團の文藝活動に至るまで

中國青年反共救國團（以下救國團と略稱）の文藝活動は、國民黨の文藝政策、及びそれを主導的に擔った中國文藝協會の影響を多分に受けていると考えられる。救國團の文藝活動のみに關する先行研究はないため、本章では國民黨の文藝政策と救國團に關する先行研究を基に、救國團の文藝活動に至るまでを簡單に確認しておきたい。

(i)　國民黨の文藝活動

國民黨文宣幹部であった張道藩は、一九四二年の毛澤東の「延安文藝座談會における講話」に對抗して、同年七月『文化先鋒』創刊號に「我々が必要とする文藝政策」を發表した。(8)實際に張道藩の提唱した文藝政策が機能するのは、一九四九年の國民黨政府遷臺以降である。(9)遷臺後國民黨は大陸での敗北の要因の一端が文藝政策の輕視にあったと考え文藝政策を重んじ、一九五〇年に中華文化奬金委員會を設立し、その後中國文藝協會（以下文協と略稱）を設立した。(10)一九五三年には、蔣介石が「民生主義育樂兩篇補述」を發表し、それについて文協で活發な議論がなされた後、張道藩が「三民主義文藝論」を發表した。それらを具體化したのが一九五四年の「文化清潔運動」であり翌年の「戰鬪文藝」の提唱である。

(ii)　救國團

國民黨は大陸時代、三民主義青年團を組織していた。蔣經國は、一九三七年にロシアから歸國し、四四年、三民主義青年團中央幹部學校の教育長に就任、その後三民主義青年團中央幹部學校と國民黨中央黨學校を統合した中央政治大學の教務長（校長は蔣介石）に任命されるものの、CC派が學生を扇動して行った排斥運動により間もなく辭任に追い込まれる。(11)遷臺後一九五二年十月三一日、救國團が創立され、蔣經國が主任に任命された。彼は要職就任後も一九七三年まで主任を務めた。救國團は「教育性、大衆性、戰鬪性」(12)を備えた「共産黨における共産主義青年團（共青團）に相當する」(13)「①黨國體制の補助機構としての青年・學生の動員・コントロール機構、②國民黨內權力競爭の新參者としての蔣經國のパワー・ベイス、の複合的な役割を持った組織」(14)であった。蔣經國は大陸時代の經驗を生かし、(15)「救國團を使って、自身の「班底」を養うと共に、團の活動を通じて本省人の幹部を養成」(16)していく。一九七〇年代以降、救國團は、以前の管理體制を維持しつつも、大規模な餘暇活動を獨占的に提供し、青年・學生の黨國體制への好感を確保すべく樣態を變えていく。(17)この結果、救國團の活動は戰後の臺灣の人々の生活に廣く浸透していった。(18)

（ⅲ）中國青年寫作協會

中國青年寫作協會（以下作協と略稱）は、一九五三年に救國團の下部組織として設立された。初代常任理事は、文協關係者ではなく救國團文教組組長の包遵彭である。創立趣旨には、「本會は、青年作家を團結させ、青年の創作への興味を育成し、創作水準を向上させ、三民主義文藝理論を樹立し、反共抗ソの宣傳强化を以て宗旨とする（會章第二條）」[19]とある。一九六六年の資料によると、文協會員の九割が外省籍作家であるのに對し、作協は、臺灣省籍者が六十九％、外省籍者は三十一％、また大學生及び專科學校生が七十八％、中高生二十％であり、會員數は發足時の二五六名から十年餘りで三千名へと增加している[20]。作協の會員が次第に增えていった要因は、文協が南、中、澎湖、東部など國內に四支部しかなかったのに對し、作協の支部は各市縣、教育機關など四十九支部以上（各大學二十九支部・各縣市二十支部、その他高校など）に及び、作協の射程が救國團に準じ本省人を含む臺灣全土の青年に及んでいたからである[21]。

（2）救國團の文藝活動

救國團の文藝活動執行主要機關は一九八二年を例とすると次のように六機關であり、一、文藝雜誌、書籍の出版、二、文藝團體の設立、三、文藝行事の主催などを通して青年文學者の育成に當たった。

① 救國團總團部

・青年文藝人材の育成（國學研究會・青年雜誌編集者研習會・復興文藝營・定期集會の開催）

・文化人の結集（全國青年文藝座談會・文化人座談會などの主催・青年文藝活動の計畫）

・青年雜誌の奬勵（全國青年雜誌コンクールを實施）

② 各救國團縣市團委員會

・青年雜誌の出版・青年文藝專集の編集

・青年文藝圖書室の設置・作協縣市分會の支援

③ 中國青年寫作協會

・文化人との關係强化・青年文藝活動の推進

④ 各中國青年寫作協會縣市分會

・青年文藝人材の關係强化・學校間の文藝活動の推進

⑤ 幼獅文化公司

・青年文藝叢書の編纂出版（共匪暴政罪行を反映した文藝叢書などの出版企畫）

・青年文藝雜誌の出版（『幼獅學誌』『幼獅月刊』『幼獅文藝』『幼獅少年』）

・作協文藝活動への協力

⑥ 各青年活動中心

・文藝環境の整備・文藝作品展覽會の開催

（王慶麟『青年工作叢書8青年筆陣―青年的文藝活動』一〇―一三頁を基に作成）

彭瑞金は『臺灣新文學運動四〇年』に、一九七二年の救國團關連の文藝團體及び文藝活動の活動資金が六十億元以上であったと記述している[22]。もちろん全ての資金が文藝活動に使われていたとは考えられないが、救國團の文藝活動がいかに大規模に展開されていたかが窺える。

例えば①救國團總團部主催の「復興文藝營」（「文藝營」とは「文學愛好者參加型の文學研修キャンプ（宿泊を伴う）」[23]）は、救國團總團部が毎年夏冬休みに、高校、大學生を對象として開催した訓練活動キャ

ンプの內、文學をテーマとしたものである。實際に業務を司ったのは③作協であり、實務上の責任者は③作協の總幹事でもある⑤幼獅文化公司發行の文藝雜誌『幼獅文藝』の編集長だった。そのため講師は『幼獅文藝』に寄稿している作家がほとんどで、參加者の優秀作品は『幼獅文藝』に掲載された。このように六つの機關は、單獨ではなく適宜協力し活動を行っている。ただこの總團部主催の文藝營への參加定員は百名のみで、地方青年にとっては參加し辛いものであった。[24]そこで地方青年たちに對して求心力を持っていたのが、各校發行の學園雜誌、竝びに②各救國團縣市團委員會發行の地方性の青年雜誌であり、現在も刊行が續いている。

これら青年雜誌は、中國民族意識の覺醒と發揚、及び戰鬪經驗の總括と傳播のため創刊され、反共文學、戰鬪文藝の提唱、或いは人心掌握の手段として、一九五〇年代②各救國團縣市團委員會單位で大量に刊行された。[25]その後青年雜誌は、次第に反共色が薄れ中高生の文藝創作の發表メディアとなっていったが、救國團の組織力を以て依然として大量に發行され續けた。一九八二年の統計によると、二十ある各縣市作協分會の月閒發行總計は、一二五萬四九一六部に上り、內譯は『北市青年』（臺北市、二十三萬冊）、『青年世紀』（臺北縣、十萬冊）、『桃園青年』（桃園縣、十三萬冊）、『新竹青年』（新竹縣、五萬三千冊）、『苗栗青年』（苗栗縣、四萬六千冊）、『中市青年』（臺中市、六萬三千冊）、『彰化青年』（彰化縣、二萬六千冊）、『南投青年』（南投縣、四萬冊）、雲林青年（雲林縣、六萬冊）、『嘉義青年』（嘉義縣、六萬冊）、『高青文粹』（高雄市、八萬二千冊）、『南市青年』（臺南市、七萬冊）等である。[26]この一二五萬部という驚くべき發行部數は、學校を介し中高生全員に强制的に定期購讀させていたためである。[27]『中華民國教育統計（一九九四簡版本）』によると、臺灣の一九八二年の中學生數は一〇八萬二三五八名、高校生數は一八萬七〇一五名、[28]合わせて一二六萬九三七三名となり發行部數にほぼ一致する。臺北市では一九九六年以降自由購讀となったが、[29]例えば一九九一年十一月七日の『聯合報』は、『北市青年』の發行部數が二十四萬部であることと同時に、救國團が教育部と學校の職權を利用し全學生に購讀を强要していることへの疑問を報道している。

これら青年雜誌は、反共イデオロギーが顯著であった創刊時、及び國民黨が求心力を失っていく九〇年代以降を除いてほぼ文藝創作を發表するメディアであり、執筆、投稿者は各縣市の中高生及び教師であった。[30]編集業務は初期には④各作協支部の總幹事が編集長として務めた。例えば高雄市の編集長は一時期劉慕沙（日本文學翻譯者、作家朱天文・朱天心の母）であった。現在の臺北市では毎月一度臺北市內各中高の國文教師の代表者が會議を開き編集に當たっており、投稿方法は自薦による直接投稿と國文の作文の授業（中學二、三年生…三週閒に五時閒）[31]での優秀作品の推薦投稿があるとのことだ。[32]このように救國團の青年雜誌と學校、國文の授業、國文教師は密接な關係にあった。

もちろん文學創作能力は學校教育で簡單に養成できるものではない。例えば李昂の處女作「花季」は『中國時報』の前身『徵信新聞報』に掲載された。當時のことを李昂は、「私が誰か知られたくなかった。高校のクラスメイトも先生（擔任を含む）も、私が小說を書いていることを知るものはいなかった、本當に一人もいなかった」[33]と回顧した。李昂が五十歲の時、「寫作的十七歲」と題して書いたこの三千字弱のエッセイに、「クラスメイトも先生も知らなかった」というエピソードは四度も書き込まれている。この執拗な言及は、先生、クラスメイ

トが知らないということがいかに特殊であり、この特殊さが李昂の作家としてのアイデンティティに深く關わっていること、また當時の青年文學者にとって、創作は學校の內部に存在すべきだと認識されていたことを物語っている。だが本省人である李昂にこのようなことが可能だったのは、施淑（淡江大學中文系榮譽教授）、施叔青（作家）の二人の姉から文學に關する「文化資本」を直接享受できたからであろう。『徵信新聞報』への投稿も姉の紹介によるものだ。[34]

青年雜誌により、創作、投稿、發表の機會が、學校という場で毎月提供され續けることは、各教科目の成績や地域の體育系大會への參加等と同じく、人より卓越したいという欲望を刺激し、創作、投稿という行爲に、單なる個人的な趣味以上の價値、つまり學歷などと同じく文學に「文化資本」としての價値を付與していくのではないだろうか。とりわけ家庭で直接受け繼ぐことのできる「文化資本」に限りある戰後第一世代の本省人青年にとって學校の影響力が如何ほどだったかは想像に難くない。

このような特權化された文學のあり方が、救國團という黨國體制を維持する擔い手を育成する目的を持った國家組織と學校との連結により、數十年に渡り中高生、大學生に提供され續けた。こうした大多數の青年を對象とした文學教育の繼續は、戒嚴令期における文學のあり方の基準を作ると共に、そのような文學の基準を內面化させ、仕事、教養、趣味、或いは手段として、文學を「文化資本」とする行爲者を育む可能性を廣げ、大衆メディアである新聞を第一の文學メディアとするような廣汎な讀者市場の形成へ繫がっていったと考えられる。

3　『幼獅文藝』

（1）一九五〇年代出版の文藝雜誌

このように一九五〇年代、學校の內部で讀者、作者の增產が行われたのは、外部で體制イデオロギーを標榜する新たな文學の讀者、作者を渴望する多くのメディアの存在があったからである。『幼獅文藝』以外にも、「『文藝創作』、『軍中文藝』から『文壇』、『文學雜誌』に至るまで、臺灣では僅か十年の間に、三十種近い文學雜誌が次々に創刊された」[35]という。だが創刊はされたものの、例えば政府系雜誌であっても、『軍中文摘』（一九五〇年、國防部總政治部）は、『軍中文藝』、『革命文藝』と二度の改名を經て六二年に停刊、『文藝創作』（一九五一年、中華文化奬金委員會）は五六年に停刊、最强の文藝組織であった文協が發刊した『文壇』（一九五二年）ですら八五年には停刊しており、生き殘りは容易でないようだ。一九五〇年代に創刊され現在も刊行中の文藝雜誌は、『皇冠雜誌』（一九五四年、皇冠）、『創世紀』（一九五四年、創世紀詩社）と『幼獅文藝』の三誌のみである。[36]

（2）『幼獅文藝』

2で指摘した青年雜誌が救國團の地方規模のものであったのに對し、救國團が全國規模で刊行したのが『幼獅文藝』であった。『幼獅文藝』は、一九五四年の青年節（三月二九日）に作協より創刊された。この「幼獅」という名は「youth」の音譯であり作協の理事が幾つか候補を擧げ、救國團主任であった蔣經國が決定した。[37]當初は作協から刊行されたが、救國團の組織改革に伴い一九五八年からは幼獅文化事業公司が出版、編集を請け負っている。

應鳳凰が、一九五〇年代創刊の文藝雜誌を四種に類別した論考の中で、『幼獅文藝』を「文藝性と教育性を備え、學生大衆を發行對象とした」[38]雜誌に分類しているように、『幼獅文藝』は反共文學といった體制イデオロギーを標榜する、青年讀者のための教育雜誌として創刊された。一九八二年の發行部數は一萬一千部であり[39]、現在も七千部が發行されている[40]。この安定した發行部數は各中學高校によるクラス單位の定期購讀により支えられてきたと考えられる[41]。例えば、李瑞騰（一九五二年―、國立中央大學中文系教授）は、「國府遷臺後三十年間の知識青年の中で文學を愛するものは、誰でも教室で氣輕に『幼獅文藝』を捲ることができた、なぜなら中國青年反共救國團が雜誌を直接各クラスに届けたから」[42]、古蒙仁（一九五一年―、作家）は、「各クラスは幾つかの雜誌を定期講讀しており、多くは理論性の雜誌で、文藝性のものは『幼獅文藝』だけだったので、私はすぐに魅了された」[43]、鄭明娳（一九五〇年―、東吳大學中國文學系教授）は、「高校時（中略）私たちの唯一の課外讀書であり（中略）創作し投稿し始めた頃、當然『幼獅文藝』も目標の一つとなった」[44]と當時を回顧している。一九六〇年代後半に高校時代を送った彼らにとって、『幼獅文藝』は、現代文學の唯一の讀み物であり[45]、憧れの雜誌として存在したようだ。

このように青年文學者に絶大なる影響を與えた『幼獅文藝』は、「臺灣文壇に最も影響力のある」[46]文藝雜誌であると評されてはいるものの、『幼獅文藝』について論じられたものは少ない。この原因を余光中は、政府系雜誌であり同人誌ではないためアイデンティファイする作家が少ないからだと指摘している[47]。また、『幼獅文藝』に限らず救國團の文藝活動について、現在に至っても文學史や雜誌についての論考で言及されている以外、研究對象とされてこなかったのは、救國團の文藝活動が臺灣の人々の生活にいかに浸透しているかということを示しており、自明のことであるが故に未だ可視化し難い現狀にあると考えられる。

それでは一九八〇年までの『幼獅文藝』について、編集長交替に基き三つの時代に區分して順に見ていきたい。創刊時は①作協の理事が持回りで編集長を務め、その後②朱橋一三三―一七九期（一九六五―六八年）、③瘂弦一八三―三二七期（一九六九―八一年）が務めた。

① 作協理事時代…一―一三二期（一九五四年―六五年）

一九五三年作協成立後、常任理事會で出版についての討議がなされた。紛糾の末、「文藝團體が文藝雜誌を出版せずにいられようか」[48]との意見により出版が決定し、その後理事會で可決され、翌五四年に『幼獅文藝』が創刊された[49]。

創刊時『幼獅文藝』は四十ページ弱の小雜誌で、內容は小說、散文、文藝評論、文壇消息、海外の作家紹介等であった。作協の理事、監事である馮放民、鄧綏寧、劉心皇、楊群奮、宣建人、王集叢の六人が交替で編集長を務めた。寄稿者は作協の作家が中心であった。例えば作協が澎湖を慰問すればその活動に關する作品を「作協訪澎湖」（一九五五年）と題して特集したり、救國團主催の文藝營開催後には、文藝營中に執筆された參加者の優秀作品や、同行した作協の作家の作品を「青年戰鬪訓練文藝隊成果」（一九五六年）として掲載したりするなど、救國團や作協の文藝活動成果の發表の場でもあった。また「全國青年學藝競賽」を開催し青年の優秀作品を掲載して、全國の文學青年たちの目標となった。例えば一九六四年には、李喬が首席に輝いている。だが初期の『幼獅文藝』について余光中が「率直に言えば、初期は大して感動しなかった。みんなもただ「青年寫作協會」の政府系雜誌だ

とみなしていた」[50]と述べているように、作協理事時代は作協の機關誌として機能していたに過ぎず、文壇に對する影響力は大きくなかったと思われる。

② 朱橋…一三三―一七九期（一九六五年一月―六八年一月）

朱橋は、一九三〇年江蘇省生まれの小說家で、三六歲で『幼獅文藝』の編集長となる。以前は『宜蘭青年』の編集長であった。『幼獅文藝』の編集長就任後は作協の理事も務めた。

朱橋時代の『幼獅文藝』も基本的には①作協理事時代を引繼ぎ、救國團の文藝活動の成果發表の場であった。例えば一九六六年の中華文化復興運動を受けて、「座談 青年的文化復興運動的意見」（一六五期）特集を組むなど政府系雜誌としての役割を果たし續けた。

一方、朱橋時代を「寫作協會に大量に新しい血が入った時期」[51]と司馬中原が稱したように、朱橋を迎え『幼獅文藝』は刷新された。例えば頁數は一三三期では百二十頁以上と三倍に、その後一三九期には二百頁を超えた。執筆者は、作協の理事でもある高陽、朱西寧、司馬中原、段彩華など軍中作家たち、陳紀瀅など文協で主導的な役割を果たした老作家たちに加え、黃春明、陳映眞、鍾肇政、鍾鐵民、葉石濤、鄭清文、李魁賢、李喬など日本殖民地期生まれの本省籍作家、更には張系國、蔣芸、蕭蕭、瓊瑤、三毛など省籍を問わず若い作家たちも執筆にあたった。例えば黃春明は、「男人與小刀」で『臺灣文藝』の「臺灣文學獎佳作」を獲得したが、その初出誌は『幼獅文藝』（「他與小刀」、一三九期、一九六五年）であり、彼の處女作「清道夫的孩子」も救國團の機關紙『幼獅通訊』に掲載されている。また當時最も影響力のあった『現代文學』（一九六〇―七三）、『文學季刊』（一九六六―七一）などに寄稿していた作家たちも『幼獅文藝』に文章を寄せた。こうしてこれまでジャンル、學校、省籍などで棲み分けていた作家たちが、そろって『幼獅文藝』に發表した樣子を、楊牧は「多くの『同人雜誌』が長年夢にも思わなかった仕事」[52]と評している。この變化は、一三八號の「原稿募集一字一元」（一九六五年六月）といった全面廣告にも見受けられるが、實際には個人的に多くの作家たちに執筆を依頼した朱橋の手腕が大きかったようだ。例えば鍾肇政は、『幼獅文藝』の執筆動機について書いた文章の中で、一九六五年二月、朱橋が鍾肇政の自宅に『幼獅文藝』への執筆依頼に來たこと、更に逆にまだ出版先が決まっていなかった「臺灣省青年作家叢書」出版の約束を取り付けたことについても書いている。[53]瘂弦は、朱橋の熱心な編集方法について「原稿のためなら、彼は作家の家で一晩でもじっと待っていられる」、「間違いなく天性の編集の天才であり、彼こそが臺灣光復後最初の編集者である」[54]と朱橋を稱えた。だが朱橋は編集長となりわずか三年で鬱病を患い自殺した。

こうして朱橋時代の『幼獅文藝』は、政府系雜誌でありながら多くの著名作家の作品を掲載し新たな書き手を求め續け、臺灣の文壇において求心力のある文藝雜誌の一つとなった。このような『幼獅文藝』が、救國團の組織力により學校を介し、唯一の現代文學の讀み物として、多くの青年讀者に毎月屆けられ、同時代の作品を讀む機會と著名作家と共に自分の作品・名前が掲載される目標とを文學青年に與え續けた意義は大きいと考えられる。

③ 瘂弦…一八三―三二七期

（一九六九年三月―八一年三月、八九年まで總編集長）

朱橋の死により、六五年から『幼獅文藝』の編集者であった瘂弦が、六九年編集長に就任した。瘂弦は、一九三二年河南省生まれ、遷臺後

一九五四年、國防政工幹部學校（初代校長は蔣經國[55]）を卒業、軍中詩人でもある。瘂弦ら軍中詩人がシュールレアリスムの手法による詩を多數發表していたことについて、松浦恆雄は「瘂弦ら軍中詩人が、すでに疎外感をバネにして臺灣社會と共有し得る新たな價値觀を見出していたことを物語る」[56]と指摘している。だが『幼獅文藝』の編集長となって以降、彼は詩作を發表していない。

『幼獅文藝』において、瘂弦は、世代を問わず多くの人々に原稿を募り、作家個人と向き合い、新人を發掘する朱橋の編集方法を受け繼いだ。また『幼獅文藝』の編集室を出て、各大學に「駐校作家」として滯在するなど青年たちと直接會することを通して新人の發掘と育成に努め、原稿を集め續けた[57]。例えば舞踊家であり作家でもある林懷民（一九四七年―、嘉義生まれ）は、『幼獅文藝』の思い出として、大學時代に小說を投稿し憧れの瘂弦から直接指導を受けたときの感動を眞っ先に書いている[58]。その投稿作「逝者」は一八九期に掲載されている。また張大春（一九五七年―、本籍山東省、臺北生まれ）は、現在最も活躍している作家の一人だが、「幼獅文藝全國小說競賽」での優勝作「懸盪」（二七八期、一九七七年）によってデビューした。軍中作家の朱西甯は、瘂弦に長編小說「八三二注」を『幼獅文藝』に發表するよう說得されたエピソードを語っている[59]。このように瘂弦は新人作家を育てベテラン作家の寄稿も募った。更に一九七一年には、吳瀛濤監修「概述光復前的臺灣文學」（二一六、二二一期）、七四年には、出獄後の楊逵を東海花園に訪ね許可を得て、「新聞配達夫」（二四九期）を載せるなど日本植民地時代の作品の掲載にも努めた。また、八〇年代には、公には禁止されていた中國三〇年代の作家の作品についての論稿も見える。例えば楊日旭原著「論茅盾的政治小說「子夜」」（三一七期、一九八〇年）、周玉山「魯迅作品的現代觀」（三八七期、一九八六年）を掲載した[61]。

更に瘂弦時代最も特徴的なのは、臺灣以外の作品、特に他の中國語圈の作家たちの作品を多く掲載していることだ。これは一九六六年に始まる中國での文化大革命に對抗し、蔣介石が中華民國の文化の正統性を掲げた中華文化復興運動の推進を受けたものであろう。また七一年の中華民國の國連脫退、諸外國との斷交によって國民黨政府が國際社會で孤立する中で、救國團が特別なポジションを以て他國との關係を維持する役割を擔ってきたためでもあると考えられる[62]。瘂弦も六六年から六八年まで、ポール・エングルと聶華苓のアイオワ大學作家工作室に滯在し[63]、その間に多くの文學者たちと交流を深めたようだ[64]。歸國後の『幼獅文藝』には、也斯（「書與街道」一九六期、一九七〇年他）、劉紹銘（「吃馬鈴薯的日子」一九七期、一九七〇年他）、西西（「騎者之歌」二〇三期、一九七〇年）、白先勇（「小說寫作漫談」二四五期、一九七四年他）、張愛玲（「連環套」二四六期、一九七四年他）[65]、思果（「偶然集」二五二期、一九七四年他）等、在米の臺灣人作家、中國人作家に加え、香港人作家など中國語圈の作家が多數寄稿した。瘂弦は當時の編集方法について、「當時、世界の華文創作に對する幼獅文藝の影響を强化することに全精力を傾けていた。私は雜誌の構成を大きくし、海外の作家の原稿を廣く募ることで、臺灣を世界の華文文學の中心にしたかった」[66]と述べている。

こうした瘂弦の編集者としての仕事を鑑みると、「疎外感をバネにして臺灣社會と共有し得る新たな價値觀を見出」した瘂弦の創作の姿勢、境地は、『幼獅文藝』の編集長として、新人發掘に努め、日本植民地時代の作家、共に遷臺してきたベテラン作家、更には在米中國人

作家、香港人作家に至るまで、臺灣內外の中國語圏の作家の原稿を集め、「臺灣を世界の華文文學の中心に」しようと、臺灣から十二年間發信し續けた『幼獅文藝』の編集を通して、模索、實踐されていたと看取できる。

中國の文化大革命が終焉した翌年の一九七七年、臺灣では鄉土文學論爭が起こった。[67] その年痖弦は、『聯合報』「副刊」（以下『聯合副刊』と略稱）の編集長に就任し、友人でもある高信疆（『中國時報』「人間副刊」編集長）と臺灣の文學を主導的に擔っていく。彼の編集長就任は、當時の『聯合副刊』總編集長であり痖弦の同窓でもある張作錦の誘いによるもので、七六年既に決定していたが、アメリカに留學豫定であったため歸國後の七七年十月に就任した。[68] そのため鄉土文學論爭が最も激しかったとき彼はアメリカにいた。その後九八年まで二十一年間『聯合副刊』の編集に携わる。一方で八一年までは『幼獅文藝』の編集長も兼任（總編集長としては八九年まで）していた。だが『聯合副刊』の編集長就任の際、作家のみならずグラフィックデザイナー林崇漢も移籍していること、[69] また余光中の「殘念ながら彼の勞力は後になって他のところに向けられ、『聯合副刊』の編集長となった」[70] との發言から、痖弦の『聯合副刊』への意氣込みが感じられると同時に、この事態が『幼獅文藝』にとっては歡迎されていなかったことが窺える。

『幼獅文藝』にとって更に決定的な打擊は、『現代文學』停刊後の一九八四年、『聯合報』と同じ聯經グループが『聯合文學』を創刊し、痖弦が編集長、社長に就任したことだ。創刊當初、『幼獅文藝』を超えようと謳った『聯合文學』は、[71] 瞬く間に臺灣で最も影響力のある總合文藝雜誌に生長した。一方痖弦が移籍した後の『幼獅文藝』は、創刊時に作協の理事でもあった④段彩華（三二八期―四四五期　一九八一年四月―九三年）が編集長となり、青年讀者を對象とした青年文藝雜誌へと回歸し、文壇への求心力はなくなっていった。だが結果的には、青年文藝雜誌として他の文藝雜誌と棲み分け今日なお刊行中である。④段彩華以降の編集長は、段時代から編集に携わってきた⑤陳祖彥（四七五期―五四六期、一九九三年―九九年）が引き繼ぎ、その後は一九六七年金門生まれの⑥吳鈞堯（五四七期―、一九九九年―現在）が三二歲の若さで編集長に就任し現在に至る。

陸堯は、『聯合文學』を、臺灣を含む「華文文學」（大陸文學・香港文學・シンガポール文學）、並びに世界文學も射程に入れた文藝雜誌であり、臺灣、及び世界の文學潮流に敏感で、小說新人賞、文藝營など文藝活動を主催し、新時代の作家育成に寄與する「動靜融合」の雜誌であると特徵付けている。[72] この「華文文學」を中心的に擔っていくことこそ、痖弦が『幼獅文藝』で模索、實踐に努めたことであり、新時代の作家育成は、正に『幼獅文藝』が長年に渡り擔ってきた役割であった。また陸堯の言う『聯合文學』の「動」の部分である全省巡廻文藝營（一九八五年創始）も、運營方法、講師の顏ぶれを見る限り、『幼獅文藝』が實施した救國團の文藝營を大いに參照したように思われる。

このような『聯合文學』に見られる「動靜融合」の文藝雜誌のあり方は、六、七〇年代までは、『幼獅文藝』のように體制イデオロギーの擔い手である讀者を擴大していこうとする政府系雜誌でしか果たし得なかった。こうした雜誌のあり方そのものが、痖弦移籍に伴い、商業總合文藝雜誌である『聯合文學』に引き繼がれていったと考えられるのではないか。もちろん背景に、七〇年代以降の政治的狀況の變化

による黨國體制から資本主義經濟への、臺灣社會におけるヘゲモニーの移行があることを見過ごすことはできない。注目すべきは、それに文學におけるヘゲモニーの移行が連動し得たことだ。作家、讀者の增産について2で指摘したが、一九七七年に六十萬部を超えた『聯合報』の讀者たちが（もちろん『聯合報』の讀者が全て、副刊の讀者だとは限らないが）、鄉土文學論爭後も『聯合報』離れせず、それどころか百萬部を超えた八〇年を迎えたときに、副刊の文壇への求心力は益々高まっていった。こうした狀況を迎えられたのは、鄉土文學論爭後の二大副刊のあり方にもあったと考えられるのではないか。つまり、二大副刊が、どちらかに加擔するのではなく、鄉土文學論爭の大きなうねりを受け止め取り込もうとしたことに、文學におけるヘゲモニーの移行が連動し得た要因の一端があるのではないだろうか。

『聯合副刊』を例とすると、鄉土文學論爭は、彭歌が王拓らを名指しで批判した「不談人性、何有文學」（一九七七年八月十七日—十九日）が、『聯合副刊』に掲載されたことを以て正式に幕が切って落とされたと言われている。[73]『聯合副刊』は、鄉土文學論爭で、反鄉土派の主張を發信するために使用されたメディアの一つであった。だが十月に歸國し渦中の『聯合副刊』の編集長に就任した痖弦は、その彭歌の「三三草」連載（一九六〇—九七年）を續ける一方、一九七七年の臺灣の文學を振り返った「一年來的我國文壇」と題した特集を組み、詩（一九七八年一月一日）、戯劇（一月四日）、文藝批評（一月七日）、散文（一月九日）、小說（一月十一日）、文藝運動（一月十二日）を總括した。これは痖弦が就任して最初の特集記事である。その內、朱炎の論じた小說部門を例として見てみると、王拓の「望君早歸」も含め、一九七七年發表の作品、作家を全て肯定的に評している。[74]鄉土文學論爭により、「王拓らを三〇年代の左傾作家と同樣に警戒しつつも（中略）彼らに「愛國者」という評價を與え、彼らを自陣營に取り込もう」[75]とした政府の姿勢を受け、また『聯合副刊』紙上においても繰り廣げられた鄉土文學論爭による傷を修復し、讀者、作家離れを避けたい巨大文學メディアの編集長としての痖弦の意圖が垣間見える特集である。その後も『聯合副刊』は、『中國時報』「人間副刊」と競いながら、「海外作家五四座談會紀實」（一九七八年五月二七—二八日）、「光復前的臺灣文學座談」（一九七八年十月二二—二七日）など意欲的な特集を組み續けた。また編集以外の彼の活動に注目すると、後に臺灣本土文學の中心的な役割を擔っていく鹽分地帶文藝營にも、彼は第一回（一九七九年）から第九回（一九八七年）の內六度も參加しており、外省籍作家としては最多參加である。

このように痖弦は、『幼獅文藝』→『聯合副刊』→『聯合文學』と移籍することにより、三十年間臺灣の文學の主流派を先導し續けた。これは言い換えれば、痖弦が主流派を導く立場であるためには、『幼獅文藝』（政府系青年文藝雜誌）から『聯合副刊』（大衆新聞）、そして『聯合文學』（商業總合文藝雜誌）への移籍が不可缺であったとも言える。また、痖弦の『幼獅文藝』を青年時代に讀み育った文學青年にとって、一九七七年以降の『聯合副刊』、八四年創刊の『聯合文學』が、受け容れやすいものであったことも想像に難くない。つまり『聯合文學』という商業文藝雜誌の成功に行き着くためには、救國團の組織力で廣汎な青年文學讀者層をつくり上げ、巨大メディアと資本で文學を大衆化する必要があったのだ。痖弦は、臺灣の文學界におけるイデオロギー對立に參加し早急に勝利することよりも、外省人の文學者として臺灣に生きることの價値を模索し續け、常に主流派として臺灣

の文學を先導することに主眼を置いて文學と關わり續けたのではないだろうか。文學のヘゲモニーの移行において、主導的な役割を果たした一人が瘂弦であったと私は考えている。こうして瘂弦は、臺灣を中心に中國語圏の作家たちの原稿を集め、「臺灣を世界の華文文學の中心に」するため三十年に及ぶ編集作業を遂行し續けた。つまり、『幼獅文藝』により模索、實踐に努め、『聯合副刊』により開花し、『聯合文學』によって成就したと考えられる。そして直接選擧による總統選擧で李登輝が總統に就任して二年後の一九九八年、瘂弦は臺灣を去りカナダへ渡る。だがその後も、臺灣において瘂弦が成就させた『聯合文學』という商業總合文藝雜誌は、臺灣の文藝雜誌の基盤となり、臺灣の文學界で主導的な役割を擔っていった。こうした「動靜融合」の文藝雜誌のあり方、文藝雜誌をめぐる作家、讀者、編集者のあり方、文學のあり方こそ、瘂弦の『幼獅文藝』が基調となりつくりあげられたものだといえるのではないか。そして二大新聞副刊を文學の最大メディアとし、商業總合文藝雜誌『聯合文學』を成功させ、その後の臺灣文學の進展を支えたものこそ、瘂弦が『幼獅文藝』を以て育てたかつての青年讀者たちなのではないだろうか。

4　おわりに

戒嚴令期の臺灣における「文學場」はいかにして形成されたのか。『幼獅文藝』編集長瘂弦の編集活動を中心に、救國團の文藝活動とその影響の分析を通して考察してきた。2では、救國團の組織力を利用し、學校を介した大規模な文學教育の繼續により、文學を「文化資本」として備えた者たちが量産され、文學のインフラストラクチャーがつくられたことを指摘した。3では、著名作家たちの作品を掲載した『幼獅文藝』が學校を通して中高生へ毎月屆けられ續けたことによる影響力、及び『幼獅文藝』にみる政府系雜誌のあり方、また雜誌編集に心血を注いだ朱橋と瘂弦二人の外省人編集長の編集活動を中心に分析した。更に瘂弦が編集者として、臺灣の文學界において、主流派を先導し續けたことについて、『幼獅文藝』以降の彼の活動も概觀しながら考察した。

もちろん、臺灣の識字率の高さ、人口、地理的規模も見過ごすことはできない。だが、救國團の文藝活動は、反共文學、中華文化復興運動といった對中國を意識した國策を契機としたものであったからこそ、初期の目的が形骸化しようとも、救國團の組織力を以て、學校を介し大規模かつ長期的に展開することが可能であったと考えられる。一方瘂弦は、國策の變更の中で、「臺灣社會と共有し得る新たな價値」を編集者として文學に求め續け、『幼獅文藝』の雜誌編集を通して實踐し、多くの青年讀者、ひいては青年文學者たちを導いたのではないだろうか。

戰後三十年の臺灣において廣汎な讀者層、作家層を構造化するに到った「文學場」は、瘂弦の『幼獅文藝』を中心とした戒嚴令期の救國團の文藝活動を基盤として形成されたと私は考えている。そして、こうした文藝雜誌のあり方、文學のあり方は、戒嚴令期はもちろんのこと、戒嚴令解除後も樣々なかたちで影響を與え續け、九〇年代の臺灣文學進展への大きな布石となっていったのではないだろうか。

注

（1）劉亮雅「後現代與後殖民—論戒嚴以來的臺灣小說」劉亮雅『後現代與後殖民戒嚴以來臺灣小說專論』（麥田出版、二〇〇六年）、蕭義玲「戒嚴令解除後の臺灣における現代小說の軌跡」『言語文化研究一三卷四號』（立命館大學國際言語文化研究所、二〇〇二年）を參照した。尙、ポストコロニアリズムについて、臺灣ではコロニアル經驗から樣々な議論（陳芳明、陳映眞等）がなされ、その解釋は「自己と他者の境界を不斷に引き直し、あらゆる時空閒から自己と他者との二項對立關係を壞していこうとする試み」（本橋哲也　成田龍一「ポストコロニアル・「帝國」の遺產相續人として」R・ヤング『ポストコロニアリズム』二二七頁、岩波書店、二〇〇五年）というより、宇野木洋が『克服・拮抗・模索—文革後中國の文學理論領域』（世界思想社、二〇〇六年）において、中國におけるポストコロニアリズムの受容について「「歐米／中國」という二項對立を、中國の側から乘り越える必要があり、その際には「中華性」の强調が重要だという論理が看取」できる點に着目し、「いわゆる第三世界・舊植民地地域に獨立後の現在においても現存する、種々のレベルの「帝國主義」的な文化侵略や覇權主義に對抗していくために、もう一方の極を打ち立てていく理論として、ポストコロニアリズムを把握し受容した側面があったのではないか」と指摘しているように、臺灣においても、陳芳明や劉亮雅の定義に從えば、ポストコロニアリズム、ポストモダニズムは「どちらも反中心で、文化多元論を主張し、「他者」の存在地位を承認している」と把握されていながらも、「ポストモダニズムは高度資本主義の歐米で起こり、ポストコロニアリズムは第三世界で始まった」という點を重視し、「ポストモダニズムの最終的な目的は主體の脫構築にあり、ポストコロニアリズムは主體の再構築を追求している」（陳芳明「後現代或後殖民—戰後臺灣文學史的一個解釋」『後殖民臺灣—文學史論及其周邊』二三—四六頁、麥田出版、二〇〇二年）と記しているように、ポストモダニズムは戒嚴令期の「大きな物語」を解體し、ポストコロニアリズムは解體した上で、本土化・フェミニズム・同性愛・眷村・原住民等「もう一方の極を打ち立てていく理論として」採用され、樣々な論述を生み出すための礎となったと解釋されている。

（2）拙論「在日本出版的臺灣灣文學目錄」『臺灣文學研究集刊』（國立臺灣大學臺灣文學研究所、二〇〇六年一一月）を參照した。

（3）副刊については、『世界中文報紙副刊學總論』（行政院文化建設委員會、一九九七年）に詳しい。

（4）「爲本報發行突破六十萬份敬告讀者」『聯合報』、一九七七年六月一日。「文協訪問團　昨參觀本報」『聯合報』、一九八〇年九月四日。

（5）ピエール・ブルデュー　石井洋二郎譯『ディスタンクシオンⅠ』（藤原書店、一九九〇年）V頁。

（6）梅家玲「性別VS家國　五〇年代的臺灣小說—以《文藝創作》與文獎會得獎小說爲例」（『臺大文史哲學報』第五五期、二〇〇一年一一月）・李瑞騰「中國文藝協會」成立與一九五〇年代臺灣文學走向（『臺灣新文學發展重大事件論文集』　國家臺灣文學館、二〇〇四年）・道上知弘「五十年代臺灣における文學狀況—反共文學を中心に」（『藝文研究』慶應義塾大學藝文學會、二〇〇〇年）・高橋一聰「一九五〇年代國民黨文化統合政策の變容—中國文藝協會に關する一考察」（一橋大學言語社會研究科修士論文、二〇〇六年）を參照した。

（7）尙、本論は戒嚴令期の臺灣の「文學場」の問題に限った。戒嚴令解除以降は青年文學の質の低下が指摘されており（「創作風不再　文藝青年向斜陽？」『民生報』一九九一年一〇月二〇日）、副刊も次第に縮小され、主導的な役割は文藝雜誌に取って替わられた（王浩威「社會解嚴、副刊崩盤」『世界中文報紙副刊學總論』（前揭書））。また九〇年代後半以降はネットの普及により、尾崎文昭が一九九八年以降の中國におけるネット小說の爆發的な廣がりについて「この現象のもつ意味は、「近代的」文化構造、すなわち、作者—編集者—出版社—評論家—文壇—讀者という

體系的構造を根本的に打ち破ったところにある。讀者より作者のほうが多いという現實はもう「近代」とはいえない」（「改革と開放」政策のもたらしたもの　一九九〇年代の文化とメディアの狀況」（尾崎文昭編『「規範」からの離脱　中國同時代作家たちの探索』（二五―二六頁、山川出版社、二〇〇六年）と指摘しているように、臺灣における作家と讀者の關係についてもポスト「近代」という視點からのアプローチが不可缺である。

（8）阪口直樹『十五年戰爭期の中國文學　國民黨系文化潮流の視角から』（研文出版、一九九六年）三三四頁。

（9）鄭明娳「當代臺灣文藝政策的發展　影響與檢討」鄭明娳主編『當代臺灣政治文學論』（時報文化出版社、一九九四年）一三頁を參照した。

（10）李端騰「「中國文藝協會」成立與一九五〇年代臺灣文學走向」『臺灣新文學發展重大事件論文集』（國家臺灣文學館、二〇〇四年）七七頁。

（11）若林正丈『蔣經國と李登輝』（岩波書店、一九九七年）三七頁を參照した。

（12）「總統對本團成立訓詞」『團務十年』（中國青年反共救國團、一九六二年）を參照した。

（13）若林正丈『東アジアの國家と社會2臺灣分裂國家と民主化』（東京大學出版會、一九九二年）五頁。

（14）若林正丈『東アジアの國家と社會2臺灣分裂國家と民主化』（前掲書）一一一頁。

（15）「國共內時期、全國の學生運動の多くは中共產系組織によって掌握され、國民黨も三青團も劣勢に立たされた。この點から見て、國民黨は大陸時期の反省に立ち青年工作を進めようとしていたのである」（松田康博『臺灣における一黨獨裁體制の成立』（慶應大學出版會、二〇〇六年、八六頁）に見られる國民黨の青年工作政策の失敗、及び、大陸時代の蔣經國が、中央で活躍する機會を得ながらも、CC派（陳果夫・陳立夫兄弟を中心とした國民黨內の勢力）や宋美齡の介入、また實力不足により招いた個人的な失敗。（若林正丈『蔣經國と李登輝』（前掲書）三七―三八頁を參照した。）

（16）若林正丈『蔣經國と李登輝』（前掲書）八六頁。尙、引用文中の「「班底」を養う」とは、李煥や李元簇など救國團主任經驗者が、蔣經國總統時代に、行政院院長、副總統等の要職に就いたこと等を指すと思われる。

（17）若林正丈『東アジアの國家と社會2　臺灣分裂國家と民主化』（前掲書）一一三頁を參照した。

（18）救國團の文藝活動を扱った論文はほぼないが、救國團に關しては、古道中「中國青年政治社會之研究―中國青年救國團自强活動個案」（政治作戰學院政治所碩士論文、一九八五年）・陳耀宏「中國青年反共救國團全國性動態青年活動」（國立臺灣師範大學體育研究所碩士論文、一九九三年）・王佩玲「環境演化與救國團之組織變遷」（國立臺灣大學政治學研究所碩士論文、二〇〇一年）・Thomas A. Brindley『The China Youth Corps in Taiwan』（Peter Lang Publishing、一九九九年）等に詳しい。

（19）郭衣洞『中國文藝年鑑』（平原出版社、一九六六年）七七―七八頁。

（20）李端騰「「中國文藝協會」成立與一九五〇年代臺灣文學走向」（前掲論文）八五頁を參照した。『中國文藝年鑑』（前掲書）八一頁。

（21）『中國文藝年鑑』（前掲書）七六頁。王慶麟『青年工作叢書8　青年筆陣―青年的文藝活動』（幼獅文化事業公司、一九八三年）二四頁。

（22）『臺灣新文學運動四〇年』（東方書店、二〇〇五年）八七頁。

（23）拙論「臺灣文藝營50年の步み‐臺灣〈文學場〉構築への一考察」『現代中國』第八〇號（日本現代中國學會、二〇〇六年）二〇六頁。

（24）蔡聲謀（前後壁國中校長、一九三七年生まれ、新營中學在學時『新中青年』に投稿。）二〇〇六年一一月一四日、筆者が電話インタビューした。

(25) 包遵彭『中國青年反共救國團在戰鬥中』(幼獅出版社、一九五五年)五五頁を參照した。
(26) 王慶麟『青年工作叢書8 青年筆陣—青年的文藝活動』(前掲書) 一四頁。
(27) 劉碧菊(『北市青年』編集者) 二〇〇六年一〇月一九日、臺北市青年期刊社にて筆者がインタビューした。
(28) 『中華民國教育統計(一九九四簡版本)』(教育部、一九九四年) 二〇頁。
(29) 劉碧菊(『北市青年』編集者) インタビュー(前掲)。
(30) 劉碧菊(『北市青年』編集者) インタビュー(前掲)。
(31) 一九七二年の「國民中學國文課程標準」によると、「國民中學」における國文の授業は、週六時間、時間配分は、「範文」四時間、殘りの二時間は、「作文」・「書法」・「語言訓練」・「課外閱讀」の授業が行われ、各時間配分は、「作文」(三週間に五時間(中一は、四時間))・「書法」(三週間(中一は二週間)に一時間)・「語言訓練」(三週間(中一は二週間)に一時間)・「課外閱讀」(毎月一冊)と定められている。(『國民中學課程標準』一九七二年、正中書局、四三—五六頁を參照した。)
(32) 劉碧菊(『北市青年』編集者インタビュー(前掲)。
(33) 李昂「寫作的十七歳」『自由時報』、二〇〇二年七月二九日。
(34) 一方、姉の施叔青は教育をテーマとしたインタビューに、眞っ先に國文の授業、國文教師についての思い出を、成功體驗として語っている。「私の國文は永遠に最高だ」「この言葉を言う時、彼女は、中學の時の先生の山東訛りが聞こえるようだ、たくさん赤丸が付けられた作文帳を持って、クラス全員の前で、朗々と讀み上げた」(「從「名叫蝴蝶」蛻變爲「枯木開花」 專訪作家 施叔青」(http://www.knsh.com.tw/magazine/man/m39.asp) 二〇〇六年一二月二二日アクセス。
(35) 應鳳凰「五十年代臺灣文藝雜誌與文化資本」『五十年來臺灣文學研討會論文集』(前掲書) 八六頁。
(36) 『文訊 二十週年 臺灣記行・百年臺灣文學雜誌展覽目錄』(文訊雜誌社、二〇〇三年)を參照した。
(37) 王慶麟『青年工作叢書8 青年筆陣—青年的文藝活動』(前掲書) 八四頁。
(38) 應鳳凰「五十年代臺灣文藝雜誌與文化資本」(前掲論文) 八八頁。
(39) 王慶麟『青年工作叢書8 青年筆陣—青年的文藝活動』(前掲書) 六六頁。
(40) 吳鈞堯(『幼獅文藝』編集長) 二〇〇六年十月十九日、幼獅文化事業股份公司にて筆者がインタビューした。
(41) 筆者のインタビュー調査によれば、『幼獅文藝』も、一九八〇年代の臺南市、臺中市では中學高校を介し個人單位で强制購讀させられていた例もあった。
(42) 李瑞騰「我看《幼獅文藝》」『幼獅文藝』六〇四期(幼獅文化公司、二〇〇四年四月) 一一頁。
(43) 古蒙仁「幼獅文藝伴我成長」『幼獅文藝』四一八期(幼獅文化公司、一九九八年十月) 二二頁。
(44) 「《幼獅文藝》與青年」『幼獅文藝』六〇四期(前掲書) 一一二頁。
(45) 高中國文統編本(一九六三年版)における中華民國以降の作家(政治家を除く)の作品の占有率は一二%であり、小說は掲載されていない。蘇雅莉「高中國文課程標準與國文課本選文變遷之研究(一九五二—二〇〇四)」(國立政治大學修士論文、二〇〇四年) 二五〇頁。
(46) 應鳳凰「五〇年代文藝雜誌概況」『文訊二一三・二十週年臺灣文學雜誌專號』(文訊雜誌社、二〇〇三年) 三一頁。
(47) 余光中「三十四年彈指間」『幼獅文藝』四一八期(前掲書) 二六頁。
(48) 劉心皇「回憶初期的幼獅文藝」『幼獅文藝』二四八期(幼獅文化公司、

一九七四年八月）七二頁。

(49) 劉心皇「回憶初期的幼獅文藝」（前掲資料）七二頁を參照した。

(50) 「青春不巧—憶《幼獅文藝》的三位獅媽」『幼獅文藝』六〇四期（前掲書）九〇頁。

(51) 「幼獅長大了」『幼獅文藝』四一八期（前掲書）二〇頁。

(52) 「紀念朱橋」『碧野朱橋當日事』（文藝書刊、一九六九年）五七頁。

(53) 「往事二三」『碧野朱橋當日事』（前掲資料）八四頁。尙、幼獅書店『臺灣省青年作家叢書』十卷に先んじて、一九六五年に文壇社より『本省籍作家作品選集』が出版されている。

(54) 「碧野朱橋幼獅事」『聯合副刊』二〇〇三年六月二一日。

(55) 松田康博『臺灣における一黨獨裁體制の成立』（前掲書）二九六頁。

(56) 松浦恆雄編譯『臺灣現代詩シリーズ② 深淵 瘂弦詩集』（思潮社、二〇〇六年）一五七頁。

(57) 龍彼德『瘂弦評傳』（三民書局、二〇〇六年）六六頁。

(58) 「感念的話」『幼獅文藝』四一八期（前掲書）二八頁。

(59) 「獅子與我」『幼獅文藝』四一八期（前掲書）二五頁。

(60) 林麗如「擴充華文視野的瘂弦」『幼獅文藝』六〇四期（前掲書）三六頁。

(61) 一九八七年の戒嚴令解除まで、魯迅作品は公的には禁止されていた（下村作次郎『文學で讀む臺灣』（田畑書店、一九九四年）一九三頁を參照した）。瘂弦は、當時のことを次のように回顧している。「三十年代の作家について話さないわけにはいかない（中略）だから、當時私はある對策を講じた、例えば魯迅について言及するなら、下にカッコ書きで「この人物はかつて共匪に利用されていた」の一言を付け加えると、後はどう述べても良かった」（楊樹清「繁華盛景50春 一九五四—二〇〇四《幼獅文藝》的主編年代」『幼獅文藝』六〇四期（前掲書）二一・二二頁）。

(62) 例えば、自由民主黨青年局は、斷交後も救國團と四十年以上交流を續けている。「自由民主黨青年局」http://www.jimin.jp/jimin/youth/rekishi/index.html（二〇〇七年一月七日アクセス）。また七〇年代、日本の大學に『幼獅文藝』が送付されていた事實も、救國團の外交の一端を表していると考えられる。

(63) アイオワ大學作家工作室は一九四二年、ポール・エングル氏が創始した、エングル・聶華苓夫妻により、一九六七年より始まったInternational Writing Program（國際寫作計畫・IWP）の前身である。瘂弦は第一回目のIWPにも招聘されている（下村作次郎「臺灣作家と中國作家の交流が始まった頃—アイオワ大學IWP」『文學で讀む臺灣』（前掲書）二三一—二三六頁を參照した）。

(64) 龍彼德『瘂弦評傳』（前掲書）五六・五七頁。

(65) 臺灣で張愛玲の作品を最初に載せた文藝雜誌は一九五七年『文學雜誌』であり、その後は『皇冠』（唯一張愛玲作品の出版權利を手に入れた皇冠出版社の雜誌）→『幼獅文藝』→『文季』→『中國時報副刊』→『聯合副刊』→『聯合文學』と續く。（河本美紀「臺灣における張愛玲の受容と影響」『野草』第六八號（中國文藝研究會、二〇〇一年）九九・一〇〇頁參照した。）『幼獅文藝』への掲載は、唐文標から瘂弦への推薦による（楊樹清「繁華盛景50春 一九五四・二〇〇四《幼獅文藝》的主編年代」『幼獅文藝』六〇四期（前掲書）一五頁）。

(66) 「臺灣副刊美學設計第一人 我所認識的林崇漢」『聯合文學』二六一期（聯合文學出版社有限公司、二〇〇六年七月）三七頁。

(67) 鄉土文學論爭については、陳正醒「臺灣における鄉土文學論戰（一九七七—七八年）」（『臺灣近現代史研究』第三號、一九八一年）、許菁娟「臺灣における鄉土文學論爭（一九七七—七八年）に關する考察」（『一橋論叢』第一三五卷第三號、二〇〇六年）等に詳しい。

(68) 龍彼德『瘂弦評傳』（前掲書）六二頁。

(69) 「臺灣副刊美學設計第一人　我所認識的林崇漢」（前掲資料）三七頁。
(70) 余光中「三十四年彈指間」（前掲資料）二七頁。
(71) 吳鈞堯（『幼獅文藝』編集長）インタビュー（前掲）。
(72) 陸堯「經典與時尚 看《聯合文學》走向雙十年華」『文訊 二十週年 臺灣文學雜誌專號』（文訊雜誌社、二〇〇三年）九五－九八頁。
(73) 陳信元「一九七〇年代臺灣的鄉土文學論戰」『臺灣新文學發重大事件論文集』（前掲書）一四六頁。
(74) 『聯合副刊』一九七八年一月十一日。
(75) 許菁娟「臺灣における鄉土文學論爭（一九七七－七八年）に關する考察」（前掲論文）一二四頁。

※本小論は、交流協會「二〇〇六年度日臺研究支援事業」の研究成果の一部である。研究助成いただきましたこと、ここに感謝致します。
※また、本小論は、東京臺灣文學研究會（二〇〇六年一一月）、お茶の水女子大學中國文學會例會（二〇〇六年一二月）での口頭發表を基にしたものである。ご意見くださった先生方ありがとうございました。